

模擬授業を用いたベースボール型ティーボールの授業検討

星野 日和 (筑波大学)

1. 目的

本研究は、ベースボール型授業の課題である i 実質的なゲームへの参加 (学習機会の保証)、ii 運動量の確保、iii 技術的・戦術的課題の困難さの観点からゲーム教材と授業過程を工夫し、模擬授業を用いてその効果を検証することを目的とした。

2. 方法

1) ベースボール型教材開発: 本研究では、攻守走の観点から教材開発を行った。攻撃面では、①攻守交代時間制 (制限時間内に打者を回し続ける)、②一塁ランナーを置いたゲーム、③右打ちを授業課題にすること、④打撃 (ライト方向のどこに打つか) を引き出す発問、⑤授業課題に合うスキル練習を工夫した。守備面では、⑥守備ローテーションに守備コーチを入れる、⑦1打席ごとに守備位置をローテーション、⑧アウトゾーンに守備2人が入るルール、⑨ベースカバーを課題にすることを工夫した。走塁面では、⑩進塁線による走塁の簡易化、⑪攻撃ローテーションに三塁コーチを入れる、⑫走塁 (三塁コーチ) を引き出す発問を工夫した。その他に⑬3コートが扇型に設置すること、⑭教具の簡易化 (バット、ボールの種類など) を工夫した。⑮きょうだいチーム制を採用して応援、審判の役割行動を促進した。

2) 対象模擬授業: 2017年5月20-21日の体育模擬授業実践 (大学生・院生・現職教員及び大学教員の171名が参加) で実施されたティーボールの4授業を対象とした。各授業の生徒役は36名 (6チーム) で、教師役は1名または2名が時間を分担して務めた。

3) 収集したデータ: 授業の組織的観察データ及び生徒のゲーム分析データ、実習中に参加者が記述した授業省察ノート、及び実習後に授業評価システムにおいて参加者が評価した授業省察を活用した。

3. 結果と考察

1) 授業の学習指導過程の実際: 本実践の4授業は、期間記録の結果、運動学習時間は50%以上を確保し、教師相互作用は100以上を超え、生徒役からの形成

的授業評価並びに参加者による体育授業評価は、5段階で4以上の高い評価が得られた。

2) 授業の省察と実際との対応: i 実質的なゲーム参加の観点から「一塁ランナーを置いたことでランナーの動きを学べる:②」「右打ちの有効性に気付ける:③」「ローテーションで様々な守備位置を経験できる:⑦」「課題のベースカバーが良い:⑨」「三塁コーチの重要性が理解できる:⑪」「進塁線で走塁が上手くなった:⑩」の省察記述が多くあり、実質的なゲーム参加 (学習機会の保証) が可能になった。

ii 運動量の確保の観点から「攻守交代時間制は打席が多く回る:①」「ランナーの機会が多くある:②」「守備側ローテーションが打席ごとで、運動量が多かった:⑥⑦」「アウトゾーンに2人が入ることで守備全員が動けた:⑧」「3コートが扇形が良い:⑬」の省察記述が多くあり、運動量の確保につながった。

iii 技術的・戦術的課題の困難さの観点から「打撃と走塁の発問の工夫があった:③④」「スキル練習が良かった:⑤」「進塁線が良かった:⑩」「バットの種類を選べた:⑭」「バットを入れるコーンが良い:⑭」「ボールの安全性が高かった:⑭」の省察記述が多くあり、技術的・戦術的課題の困難さが緩和された。

3) 攻守交代時間制ときょうだいチーム制の有効性:

攻守交代時間制はチームの実力差に関係なく、同等の打撃数が保証され、運動量の確保が見込めた。きょうだいチーム制は、チームでの合同練習や応援の役割行動を活性化させ、生徒の動機づけを高めた。

4. 結論

本研究において、i 実質的なゲームへの参加 (学習機会の保証)、ii 運動量の確保、iii 技術的・戦術的課題の困難さの観点から、具体的なゲーム教材と授業過程を提案した授業は、組織的観察と授業評価から生徒・観察役から高く評価された。

学習指導方略として採用した攻守交代時間制には、運動量の確保及び授業計画・展開をスムーズにする効果が、また、きょうだいチーム制には生徒の主体的、協同的な学びを促進する機能が示された。